国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語を母語とする児童・生徒に対する文章の難易度調整に関する考察：『毎日小学生新聞』を一例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2026-07-17 キーワード: 児童・生徒, 言語調整, リーダビリティ, 語彙難易度, 文名詞密度 作成者: 新井, 智大 メールアドレス: 所属: 明治大学大学院 博士後期課程
URL	https://doi.org/10.15084/0002000714

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 31: 81–98 (2026) Licensed under CC BY-NC-ND
ISSN 2186-1358

日本語を母語とする児童・生徒に対する文章の難易度調整に関する考察
――『毎日小学生新聞』を一例として――

新井智大

明治大学大学院 博士後期課程／国立国語研究所 非常勤研究員

要旨

日本語母語話者の児童・生徒に対する文章の難易度調整の特徴を整理することを目的にリーダビリティの知見を援用しながら，『毎日小学生新聞』（以下，毎小），及び『毎日新聞』の一面（以下，毎日）の文章を計量的に分析した。具体的には，2 つのリーダビリティ測定ツール（リーダビリティー・リサーチ・ラボ，及び *jReadability*）で文章難易度を判定した。その結果，文字種，語種において差があり，毎小は毎日より文章難易度が低かった。しかし，どちらの判定結果においても，高校生の教科書レベルの文章難易度であることが確認された。品詞において，内容語の中で比率に最も差があったものは名詞であり，毎小は毎日より 2.8 ポイント低かった。ただし，文名詞密度（1 文あたりの平均名詞数）を求めた結果，両新聞の間にジャンルや販売対象が変更されるほどの差はなく，毎小の文名詞密度は，日本図書コードの一部である C コードで販売対象が「専門」に設定されている文章と同程度であった。また，「日本語教育語彙表 Ver 1.0」を使用し，文章中の語の語彙難易度を同定した。その結果，毎小は毎日より初級語の比率が高く，中級以上の語の比率が低く，語彙難易度は低かった。また，その差は，成人対象の一般紙である毎日と異なるトピックを扱っている記事の方が顕著であり，この毎日との記事の内容の違いが毎小の相対的な語彙難易度の低さを実現している可能性が示唆された *。

キーワード：児童・生徒，言語調整，リーダビリティ，語彙難易度，文名詞密度

1. はじめに

在留外国人が増加し，日本語における非母語話者に対する言語調整が注目されるようになった。特に，その一部であるやさしい日本語は書き換え方針が検討され（佐藤 1999，庵 2009），書き換え後の難易度が抑えられた文章の言語的特徴が研究されている（近藤 2015，新井 2024）。言語調整は言語知識が少ない相手に対して行うものであり，非母語話者を対象にしたものだけではない。例えば，日本語母語話者の児童・生徒においても，日本語非母語話者に対して行われるような難易度の調整（1 文の長さを抑えるといった文の構造の調整や「摂取する」を「食べる」に書き換えるといった語彙難易度の調整）が行われているはずである。しかし，日本語母語話者の

* 本研究は，国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（プロジェクトリーダー：小木曽智信）のサブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」（プロジェクトリーダー：柏野和佳子）及び，JSPS 科研費 JP23H00072（代表者：松下達彦）の研究成果である。なお本稿は，2025 年 10 月 4 日「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会における口頭発表「日本語を母語とする児童・生徒を対象とした文章の難易度調整に関する考察―『毎日小学生新聞』を一例として―」をもとに加筆修正したものである。

児童・生徒への言語調整に関する検討は管見の限り存在しない。日本語母語話者の児童・生徒に対する言語調整，特に難易度調整の特徴が明らかになれば，日本語母語話者の児童・生徒を指導する教育現場において，教材選択，及び教材作成がより適切に行えるようになるであろう。そこで，本研究では，日本語母語話者の児童・生徒を対象とした文章を計量的に分析し，その難易度調整の特徴を明らかにすることを目的とする。具体的には，日本語母語話者の児童・生徒に対する難易度調整が行われた文章の一例として『毎日小学生新聞』を取り上げ，リーダビリティ研究の知見を援用しながら，計量的に分析する。

2. 先行研究

本研究は日本語母語話者の児童・生徒に対する難易度調整の特徴を明らかにするために，計量的に分析を行う。先行研究として，2.1 では計量的な言語情報を利用し，文章の難易度を分析するリーダビリティ研究について述べる。2.2 では児童・生徒が読む文章を対象にした計量的な研究についてふれ，2.3 では難易度調整の検討が先行している日本語非母語話者に対する調整について述べる。

2.1 リーダビリティ研究

リーダビリティ研究は，1 文あたりの文字数や語数といった表層的，計量的な言語情報から文章の難易度を順位付けすることを目指す研究領域であり（李 2016），その表層的な言語情報を変数とする計算式が成果として提案されている。英語のリーダビリティ研究は，100 年ほどの歴史を持ち，様々な難易度に関わる要因が検討されたが，現在使用されている計算式は語の長さや難解語の数などといった語彙難易度と平均文長を要素とする単純化された式に落ち着いている（野本 2016）。

日本のリーダビリティ研究が本格的に始まったのは 1980 年以降であり，コンピューターがすでに普及していた。そのため，大量のデータから計算論的手法で，計算式が構築されることが一般的となっていた。現在，公開されている計算式として日本語母語話者の児童・生徒向け文章難易度を判定する，リーダビリティー・リサーチ・ラボ（http://readability.nagaokaut.ac.jp/readability/[1]）（以下，RRL），日本語学習者向けの文章難易度を判定する *jReadability*（https://jreadability.net/sys/terms_of_use?lang=ja）がある。以下，それらに関する先行研究について述べる。

RRL の開発のための検討として，柴崎・玉岡（2010），柴崎・原（2010）が挙げられる。柴崎・玉岡（2010）は日本語母語話者の児童・生徒のための文章の難易度の測定のために，小学校から高校の国語教科書をデータとし，重回帰分析の結果から計算式を構築している。また柴崎・玉岡（2010）は，1 文における文字，語，文，命題数が多いほど言語処理が困難になるという認知心理学の知見と，文字種，語種が複数存在するという日本語の特徴から，1 文における平均文字数，平均文節数，平均述語数，文字種の比率，語種の比率を，文章の難易度に影響を与える要素と考

[1] 2026 年 4 月 2 日現在，WEB サイトは閉鎖されており，アクセスすることはできない。

えた。これらの要素を使用し，ステップワイズ法の重回帰分析をかけた結果，ひらがなの比率と平均述語数が有意とされ，その 2 つを変数とする計算式を構築した。しかし，この計算式では小学校低学年での判定精度が上がらなかったため，柴崎・原（2010）では重回帰分析をステップワイズ法から総当たり法に変え，計算式の再構築を試みた。その結果，ひらがなの比率，1 文の平均文字数，平均文節数，平均述語数を変数とする計算式を構築し，公開している。

jReadability の開発に関しては Hasebe and Lee（2015）で過程が示されている。Hasebe and Lee（2015）は，日本語学習者のための文章の難易度を判定するために，日本語学習者向けの日本語教科書と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下，BCCWJ）をデータとし，ステップワイズ法で重回帰分析を行った。その結果，平均文長，漢語率，和語率，動詞率，助詞率が有意とされ，その 5 つを変数とした *jReadability* が開発された。日本語母語話者向けのリーダビリティ（柴崎・玉岡 2010，柴崎・原 2010）と異なり，文字種ではなく語種（漢語率，和語率）が変数に採用されたものの，他の変数は類似している（平均文長→平均文字数，動詞率→平均述語数，助詞率→平均文節数）。李（2016）では，この結果（計算式）はテキストに付与された難易度をテキスト要因から予測するもので，読み手要因に関して検討が不十分であることについて言及している。また，語種や漢字などの要因は学習者の母語によって，学習難易度が異なる可能性が高いことを認めつつ，*jReadability* は日本語教科書をデータとし，「現状として可能な最大公約数としての難易度判定」（李 2016: 15）を検討したとしている。

2.2 日本語母語話者の児童・生徒を対象とした文章の計量的な文章分析

近藤･田中（2008）では，学年の上昇に伴う語彙の変化を確認するために，BCCWJ の教科書データを使用し，語種の観点から計量的な分析を行った。その結果，学年の上昇に伴い，漢語の比率が増加，和語の比率が減少することが確認されている。具体的には，延べ語数において，漢語は，27.1%（小学校前半），37.3%（小学校後半），45.8%（中学校）と増加しており，和語は 68.3%（小学校前半），57.8%（小学校後半），49.0%（中学校）と減少していた。

李（2019）は年少日本語学習者の学校教科書での学習の困難さを明確にすることを目的に，*jReadability*，「日本語教育語彙表 Ver 1.0」（以下，JEV）を利用し，BCCWJ の教科書データの文章難易度，語彙難易度を確認した。その結果，学年の上昇に伴い，文章難易度が上昇することが確認されている。文章難易度の中央値は，小学校 1 年生の教科書で 4.53（初級後半レベル），小学校 5 年生のもので 3.39（中級後半レベル），高校生のもので 2.46（中級後半レベルと上級前半レベルの境界）であることが示された。また，主要 5 教科のうち，社会の教科書の文章難易度が最も高いことも確認されている。語彙難易度においては，学年の上昇に伴い，初級語彙の比率は減少し，中級語彙の比率は上昇する傾向が確認されている。

岩田（2022）は岩田（2020）で行われた一般的な文章の計量的分析の結果を参照しながら，学校教科書の難しさについて，検討している。まず，岩田（2020）は，佐野ほか（2009）で使用されたジャンル区分に，いくつかのジャンルを加え，BCCWJ の文章の計量的分析を行った。佐野ほか（2009）では，BCCWJ のサンプルに付与されたレジスター情報や書き手情報，日本図書コー

ドの一部である「C コード（図書分類コード）」の区分ごとに語彙密度（1 節あたりの平均内容語数）を計算し, BCCWJ の文章の分類について検討している。また, その結果を「自然科学」「文学」といったトピック・内容の違い，及び「児童」や「専門」といった販売対象者の違いを反映させたジャンル区分で示している。岩田（2020）では, この区分に BCCWJ のレジスター「Yahoo! 知恵袋（OC）」（以下, 知恵袋　OC）「Yahoo! ブログ（OY）」（以下, ブログ　OY）「白書（OW）」「法律（OL）」を加え，ジャンルごとに分析を行った。岩田（2020）は文章の難易度を予測するものとして，文章中の実質語の詰まり具合が有効であると考え，その指標として文名詞密度を提案している。文名詞密度とは 1 文あたりの平均名詞数である。BCCWJ において，この文名詞密度をジャンルごとに計算した結果が表 1 である。表 1 から，読み手に一定の専門性が期待される文章では，文名詞密度が高く，一般，児童向けの文章の文名詞密度が低いことが示されている。また，法律，白書など法律が関わる公的な文章の文名詞密度が最も高く，次に自然科学，文学，Web 媒体の文章といった順に低くなることがわかっている。

表 1　文章ジャンル別の文名詞密度（岩田 2020: 34 より一部編集・転載）[2]

ジャンル	知恵袋 OC	児童（対象） LBPB	ブログ OY	文学 LBPB	自然科学 LBPB	専門（対象） LBPB	白書 OW	法律 OL
文名詞密度	3.8	4.2	4.6	4.9	8.5	11.0	15.5	18.7

岩田（2022）では，李（2019）と同じく年少日本語学習者の学習の難しさを確認することを目的に，BCCWJ の教科書データの文名詞密度が計測された。その結果，学年の上昇に伴い，文名詞密度が増加することが確認されている。また，国語は全学年を通して文名詞密度が低く（2.1–4.7），児童を対象とした文章と近いことが示されている。一方，社会は他の科目と比較して，文名詞密度が高く，小学校 6 年生の教科書の文名詞密度は 8.89 であり，学術的な自然科学の文章と同程度であることが確認されている。

2.3 日本語非母語話者に対する難易度調整の検討

田中・美野（2010）は，NHK が発行しているやさしい日本語のニュース記事である「NEWS WEB EASY」（https://news.web.nhk/news/easy/）の運用前に書き換え方針を検討するために，書き換え実験を行った。日本語母語話者 2 名に，災害に関するニュースを，平均文長の制限や連体修飾節を避けるなどのいくつかの構文条件や，旧日本語能力試験出題基準の 3･4 級（以下，旧 3･4 級）を使用するといった語彙条件を与え，書き換えさせた。その結果，平均文長は 74.4 文字から，35 文字以下に抑えられ，構文の複雑さは軽減された。一方，語彙の難易度は書き換えによって全体的に下がっているものの, 書き換え後の文章にも旧 3･4 級以外の難易度の高い語が残った。それらは，多くが名詞であったことから，内容を損なわずに書き換えようとした場合，難易度の高い名詞を難易度の低いほかの語に書き換えることが困難であると結論付けている。

[2] 岩田（2020）の（14）の表のジャンルの順番を文名詞密度の昇順に変更している。

新井（2024）では，やさしい日本語の言語的特徴を整理することを目的に，李（2019）と同様に *jReadability*，JEV を利用し，「NEWS WEB EASY」（以下，NWE），及びその書き換え前の記事である「NHK NEWS WEB」（https://news.web.nhk/newsweb）（以下，NHK）の文章難易度，語彙難易度を確認した。その結果，文章難易度は NHK が 1.40（上級後半レベル），NWE が 2.98（中級後半レベル）であり，NWE の文章難易度は NHK より低減されていることが示されている。文章難易度が低減された要因としては，平均文長，語種比率の差が挙げられた。具体的には，平均文長は NHK が 43.0 語，NWE が 26.6 語であり，語種は NHK と比較し，NWE の和語比率が 5.0 ポイント高く，漢語比率が 9.8 ポイント低いことが確認された。また，品詞において最も比率に差があったのは名詞であり，NWE の名詞の比率は NHK より 2.8 ポイント低いことが確認された。ただし，NWE の文名詞密度は 8.4 と学術的な自然科学の文章と同程度であることが確認されている。さらに，語彙難易度は，NWE の初級語の比率が 58.2% と半数を超えており，NHK に比べて，全体的に語彙難易度が低く抑えられていることが確認されている。

3. 研究課題

先行研究を整理すると，日本語母語話者の児童・生徒を対象とした文章と，日本語非母語話者を対象とした文章の分析結果で，共通して得られた知見は次の 3 つである。1 つ目は，平均文長や動詞率，平均述語数などの文構造の複雑さに関わる要素が文章の難易度を予測する変数となっていること。2 つ目は，難易度調整（児童・生徒の場合，学年の降下）によって，漢語の比率が低下し，和語の比率が増加すること。3 つ目は，同じく難易度調整によって，文名詞密度（1 文における平均名詞数）が低下することである。一方，日本語母語話者の児童・生徒への難易度調整の知見のみからわかったことは 2 つである。1 つ目は，漢字やひらがななど文字種の比率が文章難易度を予測する変数となっていること。2 つ目は他の教科と比較して，社会科の教科書の文章難易度・文名詞密度が高いことである。また，日本語非母語話者への難易度調整の研究のみで明らかになったことは 2 つである。1 つ目は名詞の書き換えに課題があり，難易度調整において名詞数の操作（名詞数の減少）が意識されていること。2 つ目は語彙全体の半数以上が初級語で構成され，語彙難易度が抑えられていることである。

以上の知見から，本研究が対象とする『毎日小学生新聞』にみられる言語的特徴としては，『毎日新聞』との比較から考えると，（1）平均文長が短い，あるいは動詞率が高いなど，文構造の複雑さが低減されている，（2）名詞数が少なく，文名詞密度が低い，（3）漢字の比率が低い，（4）漢語の比率は低く，和語の比率は高い，（5）初級語の比率が高い，の 5 つの仮説が立てられる。

これらの仮説を検証するために，本研究では，『毎日小学生新聞』を用いて，以下の 4 つの研究課題を立て，日本語母語話者の児童･生徒に対する文章の難易度調整の傾向と特徴を整理する。

研究課題 1　『毎日小学生新聞』の文章難易度はどの程度か。
研究課題 2　文字種構成・語種構成・品詞構成といった，『毎日小学生新聞』の一般的な言語統計量はどの程度か。
研究課題 3　『毎日小学生新聞』の語彙難易度はどの程度か。
研究課題 4　『毎日小学生新聞』において語彙難易度をどのように調整しているか。

4. 研究デザイン

4.1 研究素材

本研究素材は，毎日新聞社が発行する，小学生を対象とした Web 版『毎日小学生新聞』，及び成人を対象とした一般紙である『毎日新聞』の朝刊一面の，報知を目的とした文章とする。具体的には，『毎日小学生新聞』は「毎小ニュース」と題されているもの（以下，毎小）を，『毎日新聞』は「社告」「余録」「毎日ことば」と題されているものを除く朝刊一面の記事（以下，毎日）を，本研究対象とする。また，本研究対象は 2024 年 9 月に発行された 1 か月分の記事で，分量は毎小が約 4.0 万文字，毎日が約 7.4 万文字である。

Web 版の『毎日小学生新聞』は毎日新聞社の Web サイト（https://www.mainichi.co.jp/maisho/kodomo/）で記事が毎日発行されている。サイト内では，子どもの好奇心を刺激し，関心を広げ，知識を深めることや知識の土台を作ることを目的に，国内外のニュースを子ども向けにわかりやすく解説したもので，すべての漢字にルビがふられており，小学 1 年生から読むことができると示されている。ここから，難易度調整が施されていると考えられる。『毎日小学生新聞』の記事のトピックは親子で話したり，考えたりしてほしいものや学習や受験に役立つものが選定されていることも明示されており，成人を対象とする一般紙（以下，一般紙）と異なる基準でトピックが選定されていることがわかる。また，「毎小ニュース」は連載記事の扱いとなっており，記事のジャンル分けが行われていないが，同サイトで一般紙の記事を 9 つのジャンルに分けている。ジャンル・トピックが異なれば，使用語彙や文章難易度も変わることが予想される。そこで，本研究では，この 9 つのジャンルを利用し，記事を分類し，分析を行う。

4.2 研究方法

4.2.1 研究手順

研究素材の加工と分析は，以下の手順で行った。

(1)　毎日に OCR をかけ，目視確認，修正を行いながらテキストデータにする。
　　毎小は WEB サイトからコピーペーストを行い，テキストデータにする。
(2)　毎日新聞社 Web サイトのジャンルの枠組みを利用し，両新聞記事を分類する。また，毎小，毎日とで同じ事柄を扱っていると考えられる記事（以下，共通トピックの記事）に対応付けを行い，記事に「共通」とタグをつける。
(3)　毎小と毎日の漢字に付されているルビや，文の最後に括弧で示される「(2 面に関連記事)」といった補足情報を，括弧とともに削除する。

（4） RRL，及び *jReadability* を利用し，毎小と毎日の文章難易度を判定する。また，RRL の結果から総文字数，文字種構成などの情報を取る。

（5） 毎小と毎日の記事を Web 茶まめ（https://chamame.ninjal.ac.jp/）で形態素解析し，UniDic 短単位を語単位とし，UniDic の品詞・語種等の情報を付与する。

（6） 語に対し JEV で語彙難易度を同定する。

4.2.2 リーダビリティ

本研究では，文章難易度の指標としてリーダビリティー・リサーチ・ラボ（RRL）と *jReadability* の判定結果を使用する。

RRL は，学校の教科書をデータとして構築されたリーダビリティ公式を使用し，日本語母語話者の児童・生徒向けの文章の難易度を判定するシステムである。RRL には，形態素解析エンジン「MeCab 0.996」と形態素解析辞書「UniDic 2.1.2」，日本語係り受け解析器「CaboCha 0.69」が搭載されており，それらの解析結果が計算式に代入され，文章難易度であるリーダビリティ値が算出される。RRL の具体的な計算式は以下である。

$$X = 0.148 \times （文章中のひらがなの割合） + 1.585 \times （1\ 文の平均述語数\ ^{3}） - 0.117 \times （1\ 文の平均文字数） - 0.126 \times （1\ 文の平均文節数） + 15.581$$

リーダビリティ値の整数部分は学校教育における学年と解釈される。例えば，リーダビリティ値が 3.2 であれば，その文章は小学校 3 年生レベルだと解釈される。

jReadability は，日本語教育の読解クラスを支援する目的で構築された，日本語学習者向けの文章の難易度を判定するシステムである。*jReadability* にも，同様に「MeCab 0.996」，「UniDic 2.1.2」が搭載されており，計量的な言語情報が計算式に入れられ，リーダビリティ値が算出される。具体的な計算式は以下である。

$$X = - 0.056 \times （平均文長） - 0.126 \times （漢語率） - 0.042 \times （和語率） - 0.145 \times （動詞率） - 0.044 \times （助詞率） + 11.724$$

jReadability のリーダビリティ値は数値が低くなるほど，難しいテキストとされ，その数値は 6 段階の尺度で解釈される（上級後半：0.5–1.4，上級前半：1.5–2.4，中級後半：2.5–3.4，中級前半：3.5–4.4，初級後半：4.5–5.4，初級前半：5.5–6.4）。

4.2.3「日本語教育語彙表 Ver 1.0」

本研究では，語彙難易度の指標として，「日本語教育語彙表 Ver 1.0」（JEV）を使用する。日本語母語話者向けの語彙難易度の指標として，認知科学や心理言語学の研究では，親密度や具象性・

[3] 柴崎・玉岡（2010）にて，述語は，（1）出現した全部の動詞，（2）「形容詞＋名詞」の形で出現しない形容詞，（3）「形容動詞＋名詞」の形で出現しない形容動詞，（4）名詞＋判定詞，（5）名詞＋句点，（6）非自立名詞－助動詞（例；のだ，のです）と定義されている。

心像性が用いられることもあるが，言語発達の観点から包括的に検討された語彙難易度の指標は存在しない。そこで，日本語非母語話者向けではあるが，本研究では，李（2019）で学年間における語彙難易度の差を確認できた JEV を使用する。JEV は，世界各国での日本語学習辞書の開発を支援することを目的に作成された約 18,000 語の語彙リストである。リストは，日本語学習者向けの教科書 100 冊のテキストをコーパス化した日本語教科書コーパスと，BCCWJ を合わせたデータベースから出現頻度 5 以上の内容語を抽出し，5 人の日本語教師がそれらの語に対して，初級，中級，上級の各レベルを 2 段階にわけた計 6 段階で難易度の主観判定を行ったものである（Sunakawa et al. 2012）。JEV のほかに日本語学習者向けの語彙難易度を判定する際に多く使用されている語彙リストとして，（旧）『日本語能力試験出題基準』（国際交流基金・日本語国際教育協会（編）2002）があるが，その採録語数は約 10,000 語と，JEV の採録語数の 6 割程度である。より多くの語に対して難易度の判定を行うためには，JEV の方が適していると考える。

5. 分析・考察

本章では，リーダビリティ公式を利用した難易度判定システムを使用し，毎小と毎日の文章難易度を確認した後，Web 茶まめで形態素解析した結果をもとに，一般的な言語統計量の差を確認する。その後，JEV を利用し，語彙難易度について，検討を行う。

分析を行う前に，使用する研究素材の概要を述べる。4.1 で述べたように，毎小は対象読者である子どもに向けた記事の内容（トピック）が選定されており，毎日と記事内容の選定基準が異なることが示唆されている。使用語彙や文章難易度はジャンルやトピックに依存する。そこで，本研究では，毎小，毎日とで統一したジャンルの基準で記事を分類した。具体的には，毎日新聞社の Web サイトで使用されている 9 つのジャンル分類を利用し，本調査素材を分類した。また，本研究では同時期に発行された記事を収集しており，それらの記事の中には，両新聞で同じ事柄を扱っていると考えられる記事（以下，共通トピックの記事）が存在した。そこで，記事のタイトル・内容から共通トピックの記事の対応付けを行った。その結果が表 2 である。毎小は毎日より〈環境・科学〉〈社会〉のジャンルの比率が高いことがわかる。特に〈環境・科学〉は同時期に収集したにもかかわらず，毎小にのみ存在した。一方，〈経済〉〈政治〉は毎日より比率が低い。〈政治〉は，毎日では最も多い 30.6% であるのに対し，毎小では 8.6% しかない。これは 4.1 で述べたように，子どもに合わせてトピックが選定された結果だと考えられる。また，毎小と毎日とでトピックが共通している記事は 22 記事あった。これは毎小において 27.2%（81 記事中 22 記事）しか共通していないことを示しており，毎小と毎日では扱っているトピックがあまり共通していないことがわかる。

表 2 『毎日小学生新聞』及び『毎日新聞』朝刊一面のジャンル，及び共通トピックの記事数

ジャンル	毎小		毎日		共通トピックの記事数
	記事数	比率	記事数	比率	
カルチャー	8	9.9%	4	4.1%	1
環境・科学	9	11.1%	0	0.0%	0
経済	6	7.4%	14	14.3%	1
国際	8	9.9%	11	11.2%	4
社会	30	37.0%	26	26.5%	8
スポーツ	7	8.6%	7	7.1%	1
政治	7	8.6%	30	30.6%	6
地域	2	2.5%	2	2.0%	0
暮らし・学び・医療	4	4.9%	4	4.1%	1
合計	81	100.0%	98	100.0%	22

また，計量的分析を行う前に，本研究における「文」と「語」を定義する。本研究では，先行研究にならい，「文」を句点「。」によって区切られた単位，「語」を UniDic の短単位と定義する [4]。同語認定の基準は，UniDic の短単位の「語彙素」「語彙素読み」「品詞」とし，それらすべてが一致するものを同語とした。これらの定義・認定のもと，文，語を数えた総文数，延べ語数に，総文字数，平均文長（1 文あたりの文字数，及び語数のことで，総文字数，延べ語数を総文数で割った値で算出）を加えたものが表 3 である。なお，表 3 の延べ語数，総文字数には記号，補助記号も含まれている。表 3 から，平均文長は毎小の方が少し長いが，ほとんど差がないことがわかる。この結果は新聞というジャンルが一部関与している可能性が高い。新井（2024）の WEB ニュース記事の分析では，NHK の平均文長は 43.0 語，日本語非母語話者向けにやさしい日本語として言語調整がなされている NWE は 26.6 語であった。この知見を参考にすると，一般紙である毎日も，一般に向けた WEB 記事より短く，難易度調整が行われている NWE に平均文長が近い。以上から，新聞記事というジャンルにおいては，一般紙であっても平均文長が短く抑えられており，日本語母語話者の児童・生徒に対する調整として文の長さは考慮されていない可能性が示唆された。

表 3 本研究のデータベース情報

新聞種	総文字数	延べ語数	総文数	平均文長（文字）	平均文長（語）
毎小	40,585	26,464	876	46.3	30.2
毎日	75,100	49,792	1,662	45.2	30.0

5.1 リーダビリティの文章難易度

本節では，日本語母語話者の児童・生徒を対象とした文章の難易度を判定する RRL と，日本語非母語話者である日本語学習者にとっての文章の難易度を判定する *jReadability* の，2 つのシス

[4] 本研究では，UniDic の短単位を語の単位として採用しているため，接辞にあたる，UniDic の品詞 - 大分類「接頭辞」「接尾辞」も語として扱う。

テムを用いて，文章難易度について検討する。その 2 つのシステムで判定した結果が表 4 である。

RRL で判定した結果，平均リーダビリティ値は，毎小が 11.61 で高校 2 年生レベルであり，毎日が 13.84 で高校卒業以上のレベルとなった。このことから，毎小の数値は毎日よりも数値は低いものの，対象である小学生には難しいことが示唆された。また，*jReadability* で判定した結果，平均リーダビリティ値は，毎小が 2.48 であり，中級後半レベルと上級前半レベルの境界のレベルである一方，毎日は 1.82 であり，上級前半レベルであった。こちらも数値は毎日より毎小の方が低いが，李（2019）の高校の教科書における *jReadability* のリーダビリティ値の中央値が 2.46 という知見を参考にすると，毎小は高校生の教科書と同程度の難易度であることがわかる。

表 4 『毎日小学生新聞』及び『毎日新聞』朝刊一面のリーダビリティ値

新聞種	RRL		*jReadability*	
	平均リーダビリティ値	標準偏差	平均リーダビリティ値	標準偏差
毎小	11.61	2.12	2.48	0.70
毎日	13.84	2.14	1.82	0.82

以上より，どちらのリーダビリティにおいても，毎小は毎日より文章難易度が低いものの，高校生レベル程度の難しさであることがわかった。また，2.1 で述べたようにリーダビリティの判定には，平均文長のほかに，表記，語種，品詞が関わる。そこで，次節から一般的な言語統計情報を確認し，毎日より毎小の文章難易度が低い要因を検討する。

5.2 文字種構成

文字種は，文字種の比率が変数となっている RRL の解析結果を利用し，確認する。RRL は文字種をひらがな，カタカナ，漢字，記号の 4 種に分類している。また，数字は記号に分類される。RRL の文字種に関する解析結果が表 5 である。毎日より毎小のひらがな，カタカナの比率が高く，漢字，記号の比率が低い。特に，漢字とひらがなの比率において差が大きく，毎小と毎日との漢字の比率は 6.6 ポイント，ひらがなの比率は 4.6 ポイントの差がある。また，ひらがな比率は RRL の判定式の変数である。このことから，毎小の RRL のリーダビリティ値が毎日より低い 1 つの要因として，ひらがな比率があることがわかる。

表 5　文字種構成

文字種	毎小の総文字数	毎小の比率	毎日の総文字数	毎日の比率
ひらがな	16,650	41.0%	27,306	36.4%
カタカナ	3,493	8.6%	4,857	6.5%
漢字	15,043	37.1%	32,807	43.7%
記号	5,399	13.3%	10,130	13.5%
合計	40,585	100.0%	75,100	100.0%

5.3 語種構成

UniDic では，語種を和語，漢語，外来語，混種語，固有名詞，記号の 6 種に分類しているが，語種の差をより明らかにするため，近藤･田中（2008）にならい，固有名詞（毎小:972 語，毎日:1,872 語），記号（毎小：3,234 語，毎日：5,795 語）を除いた 4 種を対象とし，検討することとした。これら 4 種の語種構成比率は表 6 である。毎日より毎小の方が，和語，外来語の比率が高く，漢語，混種語の比率が低い。特に和語と漢語の 2 種において比率の差は大きく，毎小と毎日との差は両者とも 5 ポイント以上ある。和語率，漢語率は *jReadability* の判定式の変数であるため，*jReadability* の判定において毎日より毎小のリーダビリティ値が高い要因の 1 つは，この語種構成比率の差と考えられる。近藤・田中（2008）の知見によると，学校の教科書において和語率は学年の上昇に反比例し，小学校前半（1–3 年生）の教科書で 68.3%，小学校後半（4–6 年生）の教科書で 57.8% であることが示されている。ただし，近藤・田中（2008）は「利用する」のような UniDic 短単位では 2 語の扱いになるサ変動詞を 1 語にまとめており，サ変動詞の語種を「する」の前の前項部分の語種をその語の語種として採用している。この作業により，和語である「する」が減少し，本研究より和語の比率が低いと考えられる。本研究において，毎小に「する」は延べ語数で 654 語あり，固有名詞・記号を除いた全体の延べ語数からすると，約 2.5% である。これらを考慮しても，毎小の和語比率は小学校後半の教科書に近いと考えられる。

表 6　語種構成

語種	毎小の延べ語数	毎小の比率	毎日の延べ語数	毎日の比率
和語	13,508	60.7%	23,389	55.5%
漢語	7,656	34.4%	17,442	41.4%
外来語	963	4.3%	1,009	2.4%
混種語	131	0.6%	285	0.7%
合計	22,258	100.0%	42,125	100.0%

5.4 品詞構成

本研究では，岩田（2020）にならい，品詞の分類として UniDic の品詞の大分類を採用する。この定義のもと，整理した結果が表 7 である。毎小の比率が毎日より高い品詞は，代名詞，形容詞，副詞，連体詞，助動詞であり，低い品詞は，名詞，形状詞，接尾辞，助詞である。

内容語において，最も比率の差が大きかった品詞は名詞であり，名詞は毎日より約 2.8 ポイント低い。また，難易度調整において名詞の振る舞いは重要であり，文名詞密度（1 文あたりの平均名詞数）は文章のジャンルや文章の対象者に関わることが示唆されている（岩田 2020）。そこで，本研究でも両新聞の文章に対して，文名詞密度を求めた。その結果，毎小の文名詞密度は 11.51，毎日は 12.21 であった。他の文章の結果と照合するために，表 1 を再掲する。表 1 と本研究素材の値から，毎小及び毎日は学術的な「自然科学」の文章より高く，販売対象が「専門」の文章と同程度，もしくは近い数値であることがわかる。岩田（2022）によると，小学校 6 年生の社会科の教科書の文名詞密度は 8.89 であり，小学生の教科書の中で最も高い。この知見を参考

にすると，毎小は小学生の教科書より 1 文における情報の詰め込み具合が高いことがわかる。以上より，毎小は文名詞密度において，小学生の教科書より数値が高く，毎日よりは低いが，「専門」の文章と近いことが確認された。

表 7　品詞構成

品詞	毎小の延べ語数	毎小の比率	毎日の延べ語数	毎日の比率
名詞	10,050	38.0%	20,308	40.8%
代名詞	70	0.3%	118	0.2%
動詞	2,653	10.0%	4,967	10.0%
形容詞	202	0.8%	308	0.6%
形状詞	162	0.6%	325	0.7%
副詞	140	0.5%	216	0.4%
連体詞	100	0.4%	166	0.3%
感動詞	2	0.0%	2	0.0%
接続詞	50	0.2%	74	0.2%
接頭辞	235	0.9%	461	0.9%
接尾辞	1,028	3.9%	2,337	4.7%
助詞	6,200	23.4%	11,863	23.8%
助動詞	2,341	8.9%	2,913	5.9%
記号	108	0.4%	53	0.1%
補助記号	3,123	11.8%	5,681	11.4%
合計	26,464	100.0%	49,792	100.0%

表 1　文章ジャンル別の文名詞密度（岩田 2020: 34 より一部転載）（再掲）

ジャンル	知恵袋 OC	児童（対象） LBPB	ブログ OY	文学 LBPB	自然科学 LBPB	専門（対象） LBPB	白書 OW	法律 OL
文名詞密度	3.8	4.2	4.6	4.9	8.5	11.0	15.5	18.7

5.5 語彙難易度構成

UniDic の品詞の大分類における助詞，助動詞，記号，補助記号を除いた内容語に対して JEV で語彙難易度を同定した結果が表 8 である。表 8 から，初級前半語，初級後半語ともに，毎日より毎小の方が初級語の比率が高い。合計すると，毎小の初級語の比率は 42.1% であり，毎日より 8.4 ポイント高い。一方，中級以上のレベルの語の比率は毎日より毎小の方が低く，特に毎小と毎日との中級後半語の比率の差は 3.4 ポイント，上級前半語の差は 2.8 ポイントと大きい。これらから，毎小の語彙難易度が毎日より低いことがわかる。

表 8　語彙難易度構成

語彙難易度	毎小の延べ語数	毎小の比率	毎日の延べ語数	毎日の比率
初級前半	4,508	30.7%	7,421	25.3%
初級後半	1,669	11.4%	2,458	8.4%
中級前半	2,733	18.6%	5,489	18.7%
中級後半	3,051	20.8%	7,090	24.2%
上級前半	998	6.8%	2,810	9.6%
上級後半	63	0.4%	170	0.6%
その他	1,670	11.4%	3,844	13.1%
合計	14,692	100.0%	29,282	100.0%

具体的にどのように語彙難易度が調整されているかを検討するために，毎小と毎日とで共通トピックの記事に出現している中級後半以上のレベルの語の振る舞いを確認した。( ) が毎小，(') が毎日の文であり，下線部が中級後半以上のレベルの語である。(1') の毎日の文では，「雨の中、各国旗手の行進があった。」と記述している箇所が，(1) の毎小の文では「各国の旗手が行進しました。」と記述されており，一部構文の違いが認められる。また，(1') では「多様性の祭典が担う」と表現されている一方，(1) では「多様性を大事にする」と表現されており，語彙難易度が一部低くなっている。しかし，他の中級後半以上のレベルの語は毎小，毎日の両方に共通して出現しており，全体の印象として使用語彙にあまり違いがないように思える。

(1)　第 17 回夏季パラリンピック・パリ大会は 8 日夜、12 日間の日程を終えて閉幕しました。大会には 168 の国と地域に難民選手団を合わせ、約 4400 人の選手が参加しました。多様性を大事にする「共生社会の実現」という理念に加え、今回はオリンピックと同じ「ジェンダー平等」が掲げられ、出場選手の 45% が女性でした。閉会式はパリ郊外の競技場であり、雨が降る中、各国の旗手が行進しました。(『毎日小学生新聞』2024 年 9 月 10 日)

(1')　第 17 回夏季パラリンピック・パリ大会は 8 日夜（日本時間 9 日未明)、12 日間の日程を終え閉幕した。168 の国と地域に難民選手団を合わせ、約 4400 人の選手が参加した。多様性の祭典が担う「共生社会の実現」の理念に加え、今大会ではオリンピックと同じ「ジェンダー平等」が掲げられ、出場選手の 45% が女性となった。閉会式は午後 8 時半からパリ郊外サンドニのフランス競技場であり、雨の中、各国旗手の行進があった。(『毎日新聞』朝刊 2024 年 9 月 10 日)

また，使用語彙においてあまり違いはないが，括弧を利用し，語の意味を補足している場合も確認された。(2) (2') で共通して使用されている「援護区域」「控訴」といった難解語に対し，(2) では，括弧を利用して「国が救済の対象とする地域」や「地裁の上の高等裁判所に申し立てること」といった説明的な情報が挿入されている。4.1 で述べたように，毎小は学習や受験に役立つことを意識しており，それらで重要と考えられる語は難易度の低い語で書き替えるのではなく，そのまま使用し，学習機会としている可能性がある。

(2) 国が救済の対象とする地域（援護区域）の外で長崎の原子爆弾に遭った被爆体験者 44 人のうち、爆心地東側の旧3村にいた15人を被爆者と認めた長崎地方裁判所の判決をめぐり、岸田文雄総理大臣は 21 日、控訴（地裁の上の高等裁判所に申し立てること）の方針を発表しました。（『毎日小学生新聞』2024 年 9 月 24 日）

(2') 国が指定した援護区域外で長崎原爆に遭った被爆体験者 44 人（うち 4 人死亡）のうち爆心地東側の旧 3 村にいた 15 人（うち 2 人死亡）を被爆者と認めた 9 日の長崎地裁判決を巡り、岸田文雄首相は 21 日、判決を不服として控訴する方針を発表した。（『毎日新聞』朝刊 2024 年 9 月 22 日）

両新聞に共通のトピックの記事において語彙難易度の違いがあまり見られなかったが，毎小は児童・生徒に向けて記事のトピックが選定されており，約 73% の記事（59 記事 /81 記事）が毎日と共通していないトピック記事を扱っている。表 8 で確認した語彙難易度の差は，この児童・生徒に向けたトピック選択が影響を与えている可能性がある。そこで，トピックが共通か非共通かで毎小の記事を分け，語彙難易度を確認した。その結果が表 9 である。

表 9 『毎日小学生新聞』の語彙難易度構成（共通トピックの有無別）

語彙難易度	共通トピック		非共通トピック	
	延べ語数	比率	延べ語数	比率
初級前半	984	30.2%	3,524	30.8%
初級後半	262	8.1%	1,407	12.3%
中級前半	610	18.7%	2,123	18.6%
中級後半	723	22.2%	2,328	20.4%
上級前半	316	9.7%	682	6.0%
上級後半	10	0.3%	53	0.5%
その他	349	10.7%	1,321	11.5%
合計	3,254	100.0%	11,438	100.0%

表 9 を確認すると，毎小では，共通トピックの記事より非共通トピックの記事の方が，初級後半語の比率が 4.2 ポイント高く，初級語全体の比率が高い。さらに，延べ語数の少ない上級後半語を除いて，非共通トピックの方が中級以上の語の比率が低い。特に中級後半語，上級前半語の比率に差があり，それぞれ 1.8 ポイント，3.7 ポイント低い。これらから，非共通トピックの方がより語彙難易度が低いことがわかる。また，表 8 を確認すると，毎日の中級後半語は 24.2%，上級前半語は 9.6% である。表 9 の毎小では非共通トピックの記事の中級後半語の比率が 20.4% であり，その差は 3.8 ポイントである。一方，共通トピックの記事の中級後半語の比率は 22.2% であり，差は 2.0 ポイントしかない。さらに，共通トピックの上級前半語の比率は 9.7% であり，毎日の上級前半語の比率（9.6%）とほとんど差がないことがわかる。以上より，共通トピックの記事での語彙難易度調整よりもむしろ，児童・生徒に対するトピックを選択している『毎日小学生新聞』と一般紙である『毎日新聞』の朝刊一面とでは記事内容が異なり，その違いが，毎小の語彙難易度の相対的な低さを実現していることが確認された。ただし，難易度調整によって語彙

難易度が低いのか，そもそも語彙難易度が低いトピックを選んだ結果，語彙難易度が低いのかは判断できない。本研究では共通トピックの記事数が少なく，複数のジャンルで共通トピックの記事数が確保できないため，ここは本研究の限界とする。

6. おわりに

6.1 本研究のまとめ

日本語母語話者の児童・生徒に対する文章の難易度調整の特徴を整理することを目的として，リーダビリティ研究の知見を援用しながら，『毎日小学生新聞』（毎小），及び『毎日新聞』の朝刊一面（毎日）を計量的に分析した。毎小の文章難易度は毎日より低かったものの，毎小の文章難易度は高校生レベルであった。また，内容語の中で名詞の比率に最も差があり，毎小の方が 2.8 ポイント低く，文章中の情報の詰め込み具合が抑えられていた。しかし，文名詞密度（1 文あたりの平均名詞数）は両新聞にジャンルや対象を変更させるほどの差はなく，毎小の文名詞密度は販売対象が「専門」の文章と同程度であった。また，毎小の語彙難易度は毎日より低かった。この語彙難易度の低減は，一般紙である毎日と異なるトピックを扱っている記事の方が顕著であり，この毎日との記事内容の違いが毎小の語彙難易度の低さを実現していることが示唆された。

研究課題 1 の毎小の文章難易度については，2 つのリーダビリティ測定ツール（リーダビリティー・リサーチ・ラボ（RRL），及び *jReadability*）を使用し判定した。その結果，RRL では 11.61（高校 2 年生レベル），*jReadability* では，2.48（中級後半レベル）であった。高校生の教科書の *jReadability* のリーダビリティ値の中央値が 2.46 であるという知見を参考にすると（李 2019），どちらの判定においても，高校生レベルと考えられた。

研究課題 2 の毎小の一般的な言語統計量については，文字種において，毎日よりひらがなの比率は高く，漢字の比率は低かった。語種構成においては，毎小の和語の比率は毎日より高く，漢語の比率は低かった。これらは近藤・田中（2008）や李（2019）等の先行研究の知見と一致し，調整がなされていることが示唆された。また，品詞構成においては，毎小と毎日との差が最も大きかった内容語は名詞であった（2.8 ポイント差）。このことから，新井（2024）や田中・美野（2010）で重要視されていた名詞の調整が，毎小においても行われていることが示唆された。文名詞密度を計算すると，文名詞密度は 11.5 であった。岩田（2020，2022）の知見を参考にすると，この数値は販売対象が「専門」に設定された文章と同程度であり，児童向けの文章や小学校の教科書より高かった。

研究課題 3 の毎小の語彙難易度については，「日本語教育語彙表 Ver 1.0」（JEV）を使用し判定した。その結果，毎日より毎小の方が初級語の比率が高く，中級後半以上の語の比率が低く，語彙難易度は低いことがわかった。しかし，新井（2024）の知見を参考にすると，日本語非母語話者に対する難易度調整より語彙難易度は高かった。

また，研究課題 4 の毎小はどのように語彙難易度を調整しているかについては，毎日と毎小とで同一の事柄を扱っていると考えられる記事（共通トピックの記事）で使用語彙を確認した結果，違いがあまり見られなかった。そこで，トピックが共通，非共通かで毎小の記事を分け，語彙難

易度構成比率を計算した。その結果, 非共通トピックの記事の語彙難易度がより低いことがわかった。このことから，毎日との記事内容の違いによって毎小は毎日より語彙難易度の低いことが確認された。

6.2 本研究の限界と今後の展望

本節では，本研究の限界と今後の展望を大きく 4 点述べる。

1 点目は研究対象についてである。本研究では日本語母語話者の児童・生徒に向けて調整された文章の一例として，『毎日小学生新聞』を取り上げ，難易度調整の特徴を整理した。しかし，本研究で確認された難易度調整の特徴は，毎小固有の特徴である可能性や，新聞という文章ジャンル・レジスターの特徴である可能性がある。今後は異なる出版社における小学生新聞や児童書などの異なるジャンル・レジスターの文章を分析対象に加え，日本語母語話者の児童・生徒に対する難易度調整の特徴をより精密に検討したい。

2 点目は文章の難易度調整の検討範囲についてである。本研究では，リーダビリティを利用した文章難易度，及び JEV を利用し，語彙難易度を検討した。しかし，文字種は文字種構成と示すのみ，文構造は平均文長を示すのみで留まっている。また，ルビに関しては分析を行っていない。児童・生徒の場合，漢字は知らなくとも，音のみで知っている語彙も存在するであろう。そういった語彙を読む際に文字種と振り仮名の有無は大きく関わるであろう。また，5.5 で示したように，文の構造が違い，括弧を利用した補足情報の挿入も確認されている。以上より，分析観点を増やし, どの観点の難易度調整が施されているか難易度調整の全体像を確認する必要がある。

3 点目は語彙難易度の指標についてである。本研究では，語彙難易度を検討する際に，日本語母語話者，もしくは日本語母語話者の児童・生徒向けの語彙難易度の指標がなく，日本語学習者向け JEV を使用した。李（2019）では教科書の分析において，語彙難易度と学年に一定の関連性を示したが，この語彙難易度は日本語母語話者の児童・生徒に対する難易度をどこまで反映しているかわからない。そのため，日本語母語話者の児童・生徒向けの語彙難易度の指標を検討する必要があるであろう。例えば，児童・生徒やその教師の発話，児童書や絵本，教科書などの児童・生徒向けのコーパスでの頻度や，教師の主観判定，及び抽象度，親密度などが参考資料として考えられる。児童・生徒向けの語彙難易度指標があれば，難解語が特定でき，書き換えの必要の有無や書き換えの意義に関してより質的に議論できるであろう。

4 点目はトピックについてである。本研究では，毎日と毎小でトピックが共通しているか否かで記事を分け，分析を行った。これをより拡大，精密に行えば，児童・生徒に特有のトピック，児童・生徒と成人と共有したトピック，成人特有のトピックが分類できる可能性がある。これによって，学習の発展性や語彙の重要度が検討でき，書き換えか，補足情報を加えるかをより詳細に検討できるようになるであろう。

参照文献

新井智大（2024）「WEB ニュース記事のやさしい日本語の計量的分析」『明治大学国際日本学研究』20: 38–58.
庵功雄（2009）「地域日本語教育と日本語教育文法―「やさしい日本語」という観点から―」『人文・自然研究』3: 126–141.
岩田一成（2020）「文章の難易度測定方法に関する研究：「やさにちチェッカー」の「硬さ」について」『京都語文』28: 23–37.
岩田一成（2022）「教育現場における「やさしい日本語」の可能性―子どもたちにとって難しい科目は何か」村田和代（編）『越境者との共存にむけて』131–151. 東京：ひつじ書房.
国際交流基金・日本国際教育協会（編）（2002）『日本語能力試験出題基準　改訂版』東京：凡人社.
近藤明日子・田中牧郎（2008）「学校教科書の語彙―語種を観点として―」『日本語学』27(10): 26–35.
近藤めぐみ（2015）「やさしい日本語ニュースの語彙分析―一般ニュースとの語彙特徴の比較と高頻度語彙の意味分野―」修士論文，チュラローンコーン大学. https://www.arts.chula.ac.th/~japanese/_/a/theses/Shuuron_150520_Kondo.pdf（2024 年 4 月 9 日確認。2026 年 4 月 2 日現在，非公開になっている。）
佐藤和之（1999）「「災害時の外国人用日本語」マニュアルを考える―災害時情報と外国人居住者―」『日本語学』19(2): 36–51.
佐野大樹・丸山岳彦・山崎誠・柏野和佳子・秋元祐哉・稲益佐知子・田中弥生・大矢内夢子（2009）『語彙密度を利用した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』テクスト分類の試み』（国立国語研究所内部報告書 LR-CCG-08-02）東京：国立国語研究所.
柴崎秀子・玉岡賀津雄（2010）「国語教科書を基にした小・中学校の文章難易度学年判定式の構築」『日本教育工学会論文誌』33(4): 449–458.
柴崎秀子・原信一郎（2010）「12 学年を難易尺度とする日本語リーダビリティー判定式」『計量国語学』27(6): 215–232.
田中英輝・美野秀弥（2010）「やさしい日本語によるニュースの書き換え実験」（情報処理学会研究会資料）2010-NL-199(9): 1–6.
野本忠司（2016）「リーダビリティー研究の 100 年」『情報処理学会研究報告 ドキュメントコミュニケーション（DC）』2016-DC-101(8): 1–7.
李在鎬（2016）「日本語教育のための文章難易度研究」『早稲田日本語教育学』21: 1–16.
李在鎬（2019）「BCCWJ の学校教科書コーパスの計量的分析―日本語教育のためのリーダビリティと語彙レベルの分布を中心に―」『計量国語学』32(3): 147–162.
Hasebe,Yoichiro and Jae-Ho Lee (2015) Introducing a readability evaluation system for Japanese language education. *Proceedings of the 6th International Conference on Computer Assisted Systems for Teaching & Learning Japanese* (CASTEL/J): 19–22.
Sunakawa,Yuriko, Jae-Ho Lee and Mari Takahara (2012) The construction of a database to support the compilation of Japanese learners dictionaries. *Acta Linguistica Asiatica* 2(2): 97–115.

関連 Web サイト

Web 茶まめ https://chamame.ninjal.ac.jp/（2025 年 3 月 27 日確認）
jReadability 日本語文章難易度判別システム https://jreadability.net/sys/terms_of_use?lang=ja（2025 年 3 月 27 日確認）
日本語教育語彙表 http://jhlee.sakura.ne.jp/JEV/（2024 年 4 月 9 日確認。本稿では Ver1.0 をダウンロードして利用。2026 年 6 月現在は Ver1.1 が利用可能である。）
「リーダビリティー・リサーチ・ラボ」http://readability.nagaokaut.ac.jp/readability/（2026 年 2 月 19 日確認。2026 年 4 月 2 日現在，WEB サイトは閉鎖されている。）

Language adjustment in Japanese child-oriented news writing: An analysis of the *Mainichi Shogakusei Shimbun*

ARAI Tomohiro

Graduate Student, Meiji University / Adjunct Researcher, NINJAL

Abstract

This study quantitatively analyzed articles from the *Mainichi Shogakusei Shimbun* (Mainichi Elementary School Newspaper, MEN) and the *Mainichi Shimbun* (Mainichi Newspaper, MN) to identify characteristics of language adjustment, particularly difficulty adjustment, in written texts for Japanese native-speaking children. Text difficulty was evaluated using two readability systems: "Readability Research Lab" and "*jReadability*". Results revealed differences in character and word types, with MEN exhibiting lower text difficulty than MN. However, both readability scores for MEN indicated a text difficulty level equivalent to that of high school students. In terms of parts of speech, nouns displayed the largest difference in proportion among content words, with MEN having a 2.8-point lower proportion than MN. Nevertheless, the difference in noun density per sentence was not significant enough to suggest a change in genre or target readership. The noun density in MEN was comparable to that of texts requiring a certain level of specialization. Furthermore, using the "Japanese Language Education Vocabulary List Ver 1.0," lexical difficulty in the texts was assessed. Results showed that MEN contained a higher proportion of beginner-level words and a lower proportion of intermediate-level and above words than MN, indicating lower lexical difficulty in MEN. This tendency was more pronounced in articles with topics not shared by both newspapers, suggesting that topic selection for children may have contributed to the lower lexical difficulty.

Keywords: elementary school student, language adjustment, readability, vocabulary difficulty, noun density